

第3回研修会 記録

諸宗教対話ガイドライン10ヶ条 ダイアローグデカローグ

プリンシパルの中から3つ

1 正直さと誠実さ

2 自分自身が誰であるか

3 自分、自分たちの組織に対して自己批判ができる

3は、日蓮聖人知者に我が義破られずば 用いじとなり

「日蓮宗は排他的である」という他の週からかの印象

日蓮宗は一神教的？キリスト教的？天台宗の方からの印象

四箇格言の意図の一つとして推測されること 相手の得意な分野について

いる 例 鎮護国家 真言だから亡国

日蓮宗に対してかなり警戒している

浄土系の僧侶は全ては阿弥陀様の救いで完結

宗教間において誤解があるから踏み込み合わないということがほとんどの交流において行われている。

四箇格言を教典や教学に基づく傾向がある。

しかし、時代背景として、多様性というより、一つにまとめるという前

提がある。 国を治める執権に対して信仰の寸心を改めることを促している。 個々の信仰というものも国主次第の時代

逆に 社会背景を踏まえて教学を見なければとんでもない殺戮道具になる

ある一つの意図に行き着くように、ある意図に行きつかないように、教育がイデオロギー化している

四箇格言についての一考察 論文

ここに述べられる格言の意図は社会背景に基づく部分もある。

妙法五字に一切の法を納る。妙と申すは、開くという事なり。妙とは具の義なり。 題目は全てを具し、開き、蘇生すると定義される。

とある。

打ち消しではなく、打ち消し行為についての批判、および当時の僧侶たちの人倫にも及ばぬ非行に対しての社会的批判ではないか。

石城問答 日蓮宗とキリスト教の法論

佐伯上人のお寺の近くに資料が残されている。 福山市水呑町

対話者はなんらか自分自身の解答を持っている事を求められる。

宗教間対話の研究と実践の現状（山梨先生）に

草の根宗教間対話の勧めがある

大きな宗教対話では現場に即した対話にならない。

正直捨方便 英訳 レイヤサイド 捨てるではない

これは法華経以前に説かれた経典を捨てる事か？

日蓮宗の立場としては一致の思想を採用してるから、捨てない。捨てるのはむしろ分別智。

対象とする存在や教えの一方だけに価値があって、もう一方には価値がないという思想性を捨てるという事。

日蓮聖人の四箇格言もその時代に合わせた方便ではないか？

相手を打ちのめさないと治らない時代性

今はそうしないほうが時代にあってるから採用しないべきではないか。

寿量品 方便して涅槃を現ず 方便を使われている。

それが神通力だと。

日蓮聖人が批判したという批判を受ける

そこが強調されて、自分たちもそれに釣られている。

厳しい言葉を言うとき、例えば子供に危険が迫っているとき、きつい言葉になる。そのさきの悲劇を思えば言葉は強くなる。当時信仰は即社会や人生の幸不幸につながっていると捉えていた。

批判ということについて

批判は悪口か？一般的にはそういう印象だが正確に捉える必要がある

批判とは、これまでのコンセンサスに従ってこの話を聞けばこういう課題があるのではないか、ここがこれまでの流れから外れているのではないか、というかなり冷静で慎重で誠実な態度。ディベートのように相手を打ち負かす、言論による暴力ではないのではないか。

お釈迦様の弟子同士ではないか、兄弟である。兄弟同士が師匠に忠実であるかどうか、そこをさとし合うことは何も不思議ではない。捉える側の受け取り方の問題ではないか。

学術的存在論の捉え方として

本質主義 と 構築主義 がある

本質主義 それそのものとして絶対的に存在している 構築修行 外部の影響を受けている

構築主義 19世紀頃から

法華系の教義教学は本質主義になることが多い。

仏教は縁起の法門や無我の概念によって構築主義的な傾向が強い。しかし一念三千の法門は当てはめれば構築主義になる。

学会における四箇格言論文をリサーチしても4件しか挙がってこない。

我々宗教間の対話を試みようとするものにおいてこんなに重要で大きな壁であるのに。逆に、やはりあえて触れないということなのか。

お互いの意見を採用してより良いものを見出して行こう。という流れが作りにくい。

宗教は外部と内部が断絶されていないという基本概念がある。

近代思想はこれがつながっていないという思想的前提がある。

宗教者であっても近代思想的に学び解釈している傾向がある。

尊いものは、尊いから尊いのだ 本質主義

尊いものは、尊い存在として扱われてきているから尊いのだ 構築主義

「霊が見える それがねこう語る」というようなことは本質主義

社会学は構築主義が多い

神学・哲学は本質主義が多い

仏教学は難しい文献解釈学だからか？

学会では社会学はマイナーな存在。

社会学は19世紀くらいから

日蓮聖人は遥か前から社会的見知があったのか？

文証で正当性を主張するのは本質主義？

念仏を唱えなければ父母の首をはねるぞと脅迫されようともそれには屈しないが、

自分より優れた論理を聞かされたら正直にそれに従い、持論は即捨てる。と、開目抄で日蓮聖人は表明されている。

雨が降ろうがやりが降ろうが意固地になって自分の主張を曲げないというようなご性格ではなかった。

どこか自分たちが触れたくないものを覆いをかけて隠し、お互いに触れないような空気がある。

その後は、資料に基づいて質問に応じ、また簡単に一通りそれぞれキーワードについてのポイントを説明した。

宗門人には4つのタイプがある

- 1 日蓮聖人に人生捧げるタイプ。
- 2 僧侶としての能力的技術けんさんに励むが素行はあまり良くない。
- 3 参加することに意味がある、内容についてはあまり関心がない。
- 4 社会的貢献を目的とし仏教者として役割を果たすことに軸足がある。

法華經にみる諸宗教対話への誘いは

寿量品にある六或示現 自我偈においては「我時に衆生にかたる～ただ我滅度すと謂えり」

これは、世界各地のあらゆる国、あらゆる民族、あらゆる思想性のなかに私は働いている。というお釈迦様の告白文。

それを受けて、そのお釈迦様を探す旅に出る。

それは他者の中に、異教のなかに、異国の中から優れている価値を見出し引き出す活動をすることが弟子としての心情ではないか。師の存在をあらゆるところにおいて見つけたい。

これが諸宗教対話の日蓮宗的立場と内的姿勢の立て方。

化城の日本史 を読むことは他の宗教者と対話をする上での日蓮系教団の僧侶ならば情報として知っている必要のある内容が記されている。

ほか、現代宗教研究所から刊行されている「日蓮宗の近現代」も必読と心得る。

法華経は諸仏諸教が説かれる過程で分裂症を起こしている仏教全体を一つの人格体に統合する役割を持っている。だから排他的というのは法華経的ではない。

排他的な教え、「こうでなければならぬ、そのほかを採用しない」と

いう分離思考に対して批判的に向き合ったことが、批判的なところだけ部分的に切り取られて誤解されている。

自分から自由になるための宗教 だからご利益信仰を注意する。今の自分が自分を不自由に行っているのに、今の自分の願いを叶えることはさらに苦悩を悪化させる。

教相判釈そのものには問題はないが、それによって分けた優れたものだけ採用し、劣っているものを切り捨てていくという行為に問題がある。法華経的ではない。

反知性主義と二乗不作仏論は構造が似ている。

自分の能力を用いて自分のために使うことに、立場を使った暴力性に気づけないことによる問題。

自分の考えや感覚を諸手を挙げて信頼していることは危ういことではないかというのが仏道の根本課題。

江戸時代の祖師とは日蓮聖人ではないということ

法縁の力 日蓮聖人を統一的に祖師とするようになったのは近代になってから、何が起きたのか。

大曼陀羅が本尊であることは国に裁かれるために教団が危ういという時

代的事情があった。

どこへ向かおうとしているのか、

「社会のルールを変える」

核による抑止によって保たれている秩序で言い訳はない。

いざとなったらボタンを押すという脅迫の上に保たれている秩序には限界がある。

弱者と強者の関係 人倫とは強さをもって弱きを救うこと。自分の人より優れている能力で相手を打ち負かすのではなく、自分の能力は他者のために用いる。

自分の価値をより誇ったものが勝者。

相手を打ち負かした方が勝者。

というのではなく。

相手の価値をより高めた方が勝者。というルール。

宗教による教育

政治的力によるものは考えていない。

人の心が変わっていく育っていくことによって社会が変わっていく。

そういう意味での教育。価値観教育。バリューマネジメントスクール。

スクールウォーズ的ドラマのような、一人の先生によって生徒が変わっ

ていくことで学校全体が変わっていくような。

演劇の手法に見る仏教的要素の話題

仏道修行者と俳優の仕事は似ている

世阿弥の以心伝心など。

話が戻って

自分の能力は他者のために使うべきだ。

それは綺麗事、聖者の意思で俗物にはそういう考えはできない。ということではない。

もっとリアリズムな話。

自分が生きるためには自分と同じ能力を持っていない人を蔑むのではなく、感謝しなければすまない真相がある。他者を生かさなければ自分が生きていけないという真相がある。自他の関係においてはそういう構造になっている。逃れられない秩序に気づくべきだということ。

菩薩はそれを知っているだけ、誰でもなれる。

他者によって自分は見出されるのが法華経的自己認識。

ある意味キャバクラと似ている。指名≒記別

他者によって見出される成仏 他者から高い価値を見出す 慈悲